

表象文化研究の試み——中国映画研究のおもしろさ

松村茂樹
蓋 曉星
徐子怡

「表象文化部会」創設の提案

中国の学問は、もとより広範な領域を包含している。一説には漢語でいう文学には、文学・哲学・語学・歴史・芸術などが含まれる。そもそも文学の「文」は、「いれずみ」が原義で、「いれずみ」が部族を表す「マーク」となり、「マーク」が「装飾」となり、「装飾」があれば「すばらしい」状態となり、人間が「すばらしい」状態に変化することを「文化」といい、人間の「文化」を学ぶ学問を「文学」というとのこと（白川静氏の説による）。つまり、人間がすばらしくなる「文化」を学ぶ学問はすべて文学であり、文学だけでもこれだけの広い範疇を有している。この包容力を前向きに生かしたい。

昨今、中国の学問にも新たな展開が見えてきた。たとえば、映画研究などは、多くの人が関心を持ち、実際に取り組む人も多くなっている。それは、第五世代の映画などが、中国を動かす大きな力を

有していたからであろう。中国の学問は、中国を動かす大きな力があり、時には儒教や老荘が、時には辞賦や詩詞が中国を動かしてきた。今や、その力を映画も、そして“動漫”すなわちアニメも持つようになっていくのではないか。

今、日中関係は全般的に不順であり、こういった状態は双方にとって不幸である。この状態を改善するのに最も有効な方法は互いに尊敬しあうことではないか。尊敬する相手と争おうとする人間はいないからだ。戦争という不幸な時代、長尾雨山や内藤湖南は、書画文墨趣味という日中に共通する文化のネットワークを形成し、そこに参加した犬養木堂や上野理一など政財界人も中国の文化に尊敬の念を抱き、争いを避けようとした。また、一九七二年日中の国交回復前後には、ピンポンやバレエ、そして京劇や書道、囲碁が大きな力を果たした。そして、今は、これからの中国を担う「八〇後」「九〇後」（一九八〇年代、一九九〇年代生まれの世代。一人っ子世代）が愛好する村上春樹、そして“動漫”などがこの上ない力を発揮し

ている。

こういった中国を動かす分野を学問として考究することを積極的
に取り入れていくべきではないか。この分野の多くがいわゆる「表
象文化」に属す。そこで、中国の学問において最も大きな影響力を
持つ本学会が、「表象文化部会」を創設し、これまでに立てられて
きた領域にすっぽりとは収まらない分野、また、時代の流れの中で
新たに生まれた分野の研究発表に対応することを提案したい。この
ことにより、近年の懸案である二〇代、三〇代の会員数拡大も見込
めるかと思う。

中国映画研究のおもしろさ

そして今回、そのアピールの一環として、パネルディスカッション
「表象文化研究の試み―中国映画研究のおもしろさ」を行う。

中国映画研究は、表象文化研究の代表的存在で、パネル代表者（松
村）なども文人研究と兼ねて行って来た、興味深い分野である。そ
れは、中国映画研究が、中国を動かすダイナミズムの中に分け入っ
て行く魅力をこれまでの学問同様に有しながら、映像や音声からイ
メージの分析も可能な、奥深さと幅広さを具えているからであろう。

今回、三名のパネリストが、各々の研究を紹介しつつ、こんな発
見があった、こんな課題が生まれたといったことを発表することに
より、中国映画研究のおもしろさを伝えたい。このことにより、中
国研究をやってみよう、日本中国学会に入ってみようと思ってくだ
さる方を増やせればと考える。